

教育上の課題と工夫

ゼミナール I は「ティップス先生からの 7 つの提案」と「ポジデビ (positive deviant, positive deviance)」を基盤に、身近な問題とその解決法をグループワークのテーマに取り上げてきた。疫学と保健医療情報は、講義と演習がセットになっており、演習はプレゼンテーションおよびレポート (グループおよび個人) で評価してきた。その際、ゼミ I は報告・連絡・相談 (ほうれんそう)、疫学は確認・連絡・報告 (かくれんぼう) を Microsoft 365 の Office Forms で展開してきた。これらは、初学者である 1 年生を対象として、情報リテラシーにはじまり、疫学、公衆衛生、保健統計、統計学を学ぶ科目である。

これまでも、「リーダー的な人に頼った」「メンバーが非協力的」「一人で空回り」「バラバラ感」など、仲間づくりを兼ねたグループワークの難しさがみられた。そこに、ウェブ会議システム (Zoom) を導入しながらの授業展開が求められた。Zoom のブレイクアウトルームも [参加者によるルーム選択を許可] が追加されてから敷居が無くなった。また、Forms や OneDrive の設定も、学生の反応から回答期間やアクセス権を適宜修正していく方法に変更した。

遠隔講義では、学生側はマイクミュート、ビデオ停止を基本としていたため、学生の反応の代わりに、自分自身の表情がよく分かってしまった。COVID-19 の感染拡大に応じて、啓発ポスターや動画コンテンツを授業中に紹介するなど、例年になく YouTube の視聴を推奨した。学内では、2 つの教室を同時利用して、研究室から講義の配信を行った。このような人数制限による 3 密防止、手指消毒の徹底が図られ、さらにアクリルパネルの仕切りと黙食、課外活動の休止など、様々な感染拡大防止対策がとられた。

止むを得ず期末試験は遠隔実施となり、Forms の条件設定を事前告知した。試験時間は 45 分、50 問中 30 問を成績評価に用いるとした (最終的に正解率の高い問題と低い問題を評価から外すため)。問題とその選択肢 (四肢択一) はシャッフル表示され、送信後に点数がメール送信される設定とした。試験開始時刻の同時アクセスによるネットワーク負荷の増加、中途の操作ミスを想定して、Forms 上 [一人につき一つの回答] とはせず、複数回の送信可とし、開始時刻と終了時刻は自動記録されることを説明した。このような試験環境でも、学生からはカンニング防止の点から仕方ないとの理解が得られた。

---

With コロナに向けて

With コロナは、むしろ Zoom の活用を積極的に行う。講義録も学生プレゼンテーションも動画で残せるという魅力がある。オフィスアワーは現実的ではなく、メールでの Q & A が代替となっていたが、対話ツールとしても Zoom は有用である。気づかされた学生の漠然とした不安感と孤独感、これに伴うストレスを軽減するためには、たとえ遠隔でも、学生間、学生教員間の対話の機会を増やしていく必要がある。この授業時間外の対話機会は、コロナ禍がもたらした教育学習環境と捉えることができる。この 2020 年から 2021 年は、教育的に“対話”することの重要性を再認識する期間となった。

---